



1 1981年、甲子園出発前に行われた市民壮行会 2 甲子園で入場行進する大府高校ナイン(前から2人目の選手が横原さん) 3 センバツ2回戦御坊商工戦、大雨の中での投球 4 ピンチの場で横原さんを中心にマウンドに集まる選手ら 5 甲子園のマウンドで力投する横原さん



▲1981年4月15日号 甲子園特集



▲1981年7月15日号 最後の夏への意気込み



▲1982年1月1日号 新春特集 今年の顔



▲1984年1月15日号 プロ野球新人王獲得後の市長表敬

後輩への誇り 大府への愛着

ミスターパーフェクト

横原 寛己



>>>PROFILE 大府高校を卒業し、1981年ドラフト1位で巨人に入団。翌年4月16日阪神戦でプロデビュー。同年12勝を挙げて新人王に輝く。1994年5月18日、広島戦で完全試合を達成。通算468試合登板、159勝128敗56セーブの成績を残し、2001年に引退。現在は野球解説者として活躍。

巨 人で1990年代、先発投手3本柱の1人として活躍し、平成唯一の完全試合(※)達成者である横原寛己さん。横原さんは大府高校出身で、夏1回、春1回甲子園に出場しています。

公立高校から甲子園に

横原さんは半田中学校時代に野球を始めます。当時から背が高く、大型投手として県内では有名で、野球強豪校から勧誘を受ける中、大府高校を選んだ理由を「公立高校に行きたかったんです。兄が通っていたし、公立で甲子園を目指すなら大府かな」と語ります。甲子園を目指すために大府高校に進みました。しかし、控え投手としてベンチ入りしていた2年生の夏、チームは甲子園出場を決めました。初めての甲子園は、高校時代に最も印象に残っている思い出で、「悩んだ末に大府高校への進学を決めました。この選択は間違いはなかったと感じました」と話します。

早くも夢をかなえた横原さんですが甲子園での登板はありませんでした。それでも出場したことで「強豪校にも勝てる自信が付きました。新チームでは自分がしっかりしないといけないと強く思いました」と自信と自覚が芽生

年12勝を挙げ新人王に輝きます。その後もチームの主力選手として活躍を続け、平成13年の引退後は野球解説者としてお茶の間の人気者となります。

後輩への誇り

高校卒業後も母校のことを常に気に掛ける横原さん。自身のセンバツ出場後、春3回、夏1回の甲子園出場を果たした後輩たちを「公立高校で甲子園出場を果たしたことが素晴らしい。甲子園で『OBU』のユニフォームを見ると当時の記憶がよみがえり、誇らしい気持ちになります」とたえま

野球を愛し、母校を愛する横原さんは、令和2年の春夏の甲子園が中止になったことに「本当にかわいそうで、心中お察しします。甲子園に出場することも記憶になるが、ここまでやってきたことも思い出だったりします。残

えます。その言葉通り、新チームではエースとなり、チームを県大会、中部地区大会優勝へと導き、初めてのセンバツ(春)の甲子園出場を決めます。

センバツ初戦、金村義明投手(後に近鉄・中日・西武で活躍を擁する報徳学園兵庫)と対戦しました。1回表、初めて甲子園のマウンドに立った横原さんは「初球を投げる」と球場全体が湧いたんです。今でも忘れられない」と振り返ります。この試合、大府高校は5対3で勝利。ストレートは当時の甲子園最速147km/hを計測しました。続く2回戦は大雨の中、本来の力を出せず、御坊商工(和歌山)に0対4で敗れますが、剛速球投手として全国にその名をとどろかせます。

ドラフト1位でプロの道へ

夏は県大会で敗退し、甲子園に届かなかった横原さんですが、その年のプロ野球ドラフト会議で巨人から1位指名を受けました。「3時間目の数学の授業が終わった後に女性の先生から聞きました。うれしくて次の授業の内容は頭に入ってきてませんでした」と運命の日を振り返ります。

プロ入団後、1年目は2軍でじっくり鍛え、2年目(昭和58年)の阪神戦で初登板初勝利を完封で飾り、「プロでやれる」と確信した横原さんは、この

りの高校野球生活を刻み込んでほしい」と高校球児を気遣います。

大府を愛し続ける横原さん

横原さんが甲子園に出場してから40年がたとうとしています。大府といえば大府高校の横原の印象は野球ファンに限らず、根強く残っています。大府市民にとっても横原さんは誇りであり、自慢のヒーローでもあります。今もたまに大府に足を運ぶそう。「私が高校生の時と比べて随分街並みが変わったよね。昔は農地が多かったけど、今は名古屋市のベッドタウン。さらに発展して100年20年と続く大府であってほしいです」と市制50周年に寄せる思いを話します。

40年前、「大府」の名を全国に知らしめた剛腕投手は、今でも「大府を愛し続けています」。

※完全試合…相手チームの打者を安打・四死球・失策で一度も出塁させずに勝利すること。パーフェクトとも呼ばれる。